

WA 8
5
1

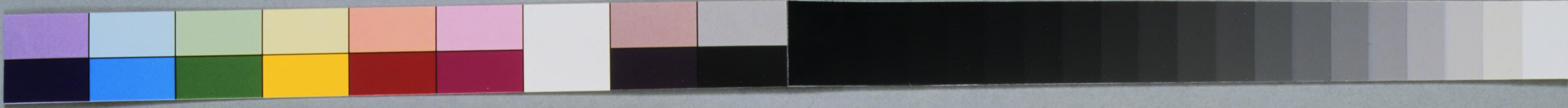
館 書 圖 京 東				
四	五	別	小	和
冊	〇	三	つ	書
架	號	函	類	門

鴉鷺合戦物語 WA8-5 01-001

国立国会図書館







鴉鷺合戦物語目録卷一



一 初 管 絃 之 八 曲 乃 事  
 一 七 夕 因 位 鳥 假 粧 文 同 文 使 打 擲  
 一 山 鳥 石 帝 述 懷 面 一 淨 定 鳥 羽 玉 事  
 一 山 鳥 矣 魁 黒 白 駢 襟 林 友 方 廻 文 子





そ連鳥鳥林下りしはくはる則是廣長右乃志  
みぎハよつ終あふ清澤が小あつとや清小  
云物乃おる一世君じやうちうのおるわ仏小  
きどくの性り一宿生中來れ性也服よみくそ  
多と分と再よつてそ考とと記中人もみ時ハ  
そうあいの鳥ひをきさして町建城いこく守  
まやう裏乃さうれし一有時を著思れおと  
わらうてあ連小恒せは樹以乃風小似くわ來  
てとくはら守去てかへらむしとに志わね  
一切有る乃法ハびぎんやうやうのし一振  
天地開ひやくして人民くめてうまれてこ

のし三宣又帝のしめ一天を仁りしとく  
しそ世海を微小此つらう王臣なとはもらさ  
るよあしと孝行の思自然ふふ一國家無  
およそくすり事久しうくに固のせ小及  
て乃厚うやく申と海へ礼とそよとと連しわ  
伴ららうだん王乃とおうしうしうせき子  
武助と清くふ世書又經ハ乃を多む寸六たり  
三略ハ款とわら月とさうら也乃たふと  
きんた文張以てあ連城くし一款をこふと  
まんそ武と以て是と志はむ故よ治せ利民文  
武と以て強いと守和漢の勇士古今此武將誰



う文あつて武るうらん何そぶあ門て文かう  
らん文とたよし武と太よしとこれ二のけむさ  
乃とくけてハいるあをうう然とももやう  
きりりくぐりておひいつく小をこれ武みた  
里小あうかうか人蒸子とあさかりぐ人知者と  
そひびむたとさ記とてけう熱とひのとと  
強あひひと飛きんそう歎よままで合戦闘争  
ともつうととるかわよ門てまねう鳥鶴え  
年九月上旬致ふきさあ乃合戦侍里そのらん  
志やうとと門ねうりあ路乃くさくあうと  
そうけ給子我園林小鳥あり東市の作棟乃ま

あうろとぞりくうりの鳥あんま男子に生た  
子思おりいんすくくやうととてりあ  
何のうん女れ能藝そまへあはあうらんり  
整りとひとハとやと因けり所よ中かもの  
森小鷺あり山城のおは当此政志ろとそえけ  
かぶ高舟一れやさ男文武二乃乃進者るわま  
秋小船とさうしてハ武勇よえりこととめ  
うし周詩よあろとそめてあ花多乃屋さ  
あうり城うるむじこれまき志ろ小熱女あわ  
あんでんあうらかくせは里苑の表面と帯あ  
はりあひ船とわううてううろよそがひを





さうぞの北書乃甲のにをひりしとさうぞ  
あろしとくハ年よりを母とさひて終極ふ  
身まひハ中しわととあやうなりしにあま  
て物かそくさうぬれふせい人小町をまわ管  
結臣律乃なまれ世りこゑるふし行ふさ  
乃初ハ又たさひるし海すひますあんなの  
志とける紀ハ書抄の系乃東風小みたあそ  
よそ初ハ盛武部ノ源氏とさしふて乃し  
里まかくやとおお急しわ和考北及小をまじ  
きてハあゝる乃鶴をも事とも世にことそ  
のうんるりさハ花よるくうらひとあそす

られしわ枝う中母りひめ乃まうまどくさ  
小登乃小町り書城中としてるやあか女のけ  
志やうとらりしとく又考とうさくさ乃かく  
里め色細しわうやうふらる所のりにふま  
てあろたらくまならひめり終句さひく終  
一のめ此そのあまはさきり母ととりてと一を  
々まばひとへ小書北う人乃親としそむびえ  
くれあう時うの姫めのとよえけりあ和親乃  
事ハいよみまよめとを太くこよああうりそ  
切りなわりの世う定さうまりいの成りそ  
連作やらんめ乃とのいさく天地ひりりよ



里より海をわたりても子もわかれ代ゆ  
文字の敷色さたまら守書八重雲一わ  
めて三十一字一さため一わりのきと  
きりたらひりり建うさよ海さるん  
てむいの縁風のよゑもてもあ  
風情かくれとも人れんおるく  
さこのりすよみほくすりさ  
ハぢなくさと連るをさくさ  
とくまき目書乃耐よあさ  
うらみらるるびのかりふ  
さだにせだか乃風とま  
ひねの西は海ととうつ  
一乃戸初そととく  
まくり一とのけ  
るれ里中一乃々  
ふとんと瑞しか  
他靈とうさう  
言きごふあ  
ふらさり入  
本も急あ  
浪り一ハ紅  
まげん花よ  
乃わ月よ  
むわ月よ  
むわ月よ





くに花よるわてとくあり月入り方わて思あ  
らんあや福んまうそうとのそくのそ小あ  
と佛乘れ妙道よりいへき物也是小あ  
神の伝ふものう志う志あまうやハ懐大善  
薩ハ神の本之志あまも小光ふきりよ  
まうくもみ神の宰相か官階とすめ位  
吉太助神ハ和やさびき衣やうすきとあいじ  
まうくしてゆきあい和と神とにとあ  
よはへり三十六人の執仙人九家持遍照素性  
なりひり小燈小町とあゆきとまうめ  
て皆是佛隠の化あんならさまは人丸ハ月の

く乃乃成よまくと和園乃あんなとこま  
へ一首よ六歳とそるんて是をもつて和執れ  
中と申あまふたくとまたくひあき権者と  
いんそ世原なわひり小燈小町ならるしとも  
ふたも事をたりれめとるわてちりひの及小  
たわとありは懐申均ハ権樂世累れ執乘乃  
菩薩正親善のけあんなるわ内あひひそり  
ちりひれ及とあひりこいとあかよハみわ  
に成成ひさがあ小燈とわ成まえ三子七百三  
十三人小ちまりてひと里とえおろさきと云  
あ小あうらめや我小あふ男の世世人のく



きふゆくねたしむるとけとりひて我なりち  
きりふ乃女としてきか伝果よいききめん  
とさり住吉の行ありふハ大ひ乃まの志やく  
と思ひひてきり乃ひめ松いく代庵ねらんこ  
えの——み桑乃あまう屋まてハ中地の風光  
と日とまを月やあまねとまけくけあんまわ  
あわて元學正年五月廿八日いぬのこくふみ  
十六ありて水小むひひてたまり紗ひぬ小燈  
小町ハ大目乃るんけ也あくさうりるわし時  
まい電まくり人のあろまをやま——志とり花  
井と路へねまいぬふりにさすらひ致小さ庵

ふひてき關寺乃やと里小磨わとむとびて野  
ま乃りりる小命とさ——へられうきま海ぬを  
や——と智徳大師はらんし南——くしてまよ  
七日乃内説法まるとめされ——に君れあり  
さ庵とちてまのうさりし時流陸うひまひ  
くがわあまの代めす事ハをのくやひまど  
目ひまんと海しとよ何それ——むが急うり  
そのまうこり——きとるわてひり——志れまま  
——福今ハ人ふりともれ傳い小乃乃がとり  
のかまのとりわて執心る浅秋風の吹小はけ  
てまあまめ——とえのす是ままハあさ切り









乃たうう物ふさうの名さるれとをきよふ小  
よりてやあがりりてそひきくらりしとハあん  
た乃重主より重六代はらぐふけんあよりみ代  
白くより三代乃弟子安藝の氏平祿のかり  
まなわ佛世の大樹きんが種がひまうか里  
れしとりせうきえ乃そてとひらかへーた  
まひー曲志さうていのけいかり宮とまね  
う建あゆひー花陽主人のつま著もくくや  
らんとおがえりどぶもをけりりりり  
そうげ給しとよまじうてんかあうびんあう  
か音是一つつてう呂の曲也けいしとくひさう

らやうちうよう未らう大合さう新翁そ角調  
大乃大曲也片の乃大曲小あうと拍子つきて  
るひる響響調ハ音向樂響的樂木也めの  
どのいもく管絃小のうまはらんハ調子に  
うとくてをかるふ色ううたこのたとりあま  
くちよあまはよららのまよあうと耳乃さと  
まよとを侍てかん勢とも耳乃さうむんさうさ  
まは世とあう人れあ知るらりこと一然一小  
み着の事ま志やう角ちう羽るわいあれふ  
かゆひみ着しりせりみえしわ文ハ一あつ  
調出のとも悉よるすらふ志やうハ平調合の





母とらういりまそらふ角ハ双調本の音氏  
よかしらふちうハ黄鐘調尺乃おろりまそ  
らふ羽之響游調水の音抑りまそらふ音  
と曰季才角呂律に上らふ双調ハ表東呂黄  
鐘調ハ表南律乃平調を秋西律響游調ハ冬  
水律一こ月調ハ中且う呂乃七音の表み音  
小童ちう響羽とら且へるんちハ上無調り  
あうらるん羽を下びてうりあうあうひ  
まうん羽ハ上びてう小あうら交るりといふ  
又上び調と林鐘調といふ下び調とかくとう  
と云六調子のり五調子り六食調とら且

へて呂乃七調子此事大食調と平調と成  
わくせて一とと上下乃無調とくもて二と  
と七調子にあうら十二調子のり十二列  
也金石系竹匏こく木乃金を響せき表磬  
糸ハ弦竹を管匏ハ笙太ハ乃んくもはぐこ  
本ハ表やくるわ呂律の事律ハ雅鳳乃昭也  
そ音まよく長し呂を雄麗乃昭乃わ音小こ  
りこ志りそおれるひことも月う小  
中るかつ記曰樂ハ樂るわ悉子そのしみる  
そのみらと悉か人ハたのりみてそよくと  
えうり及と表りてよくとせいもるときん



たのあんでみよすよく城もつてみちと  
すよくとさんく海と川てあまとい人里又曰  
樂者金石也一急競けん乃乃を云小あさ  
はるわ陰陽れ和明と云也又曰有流の素ハ樂  
と以て人とたのしき一む無流乃素とらくと  
も川てあをた乃あむ人とたのあむるハ其國  
まうくあをその一む人ハ久くす競結記  
あ大うていせうと流りてかうもう乃樂と  
すあう後と依わて急流乃素とすていも後也  
里やうハ流るわせうとふいてんうととむ  
かゆ人よていせうといふくを流るを流て流と

伝とくあがゆへ小あう管んといふいり小  
あ書あ録といりあ物と流流はるよとあえハ  
あ流のまやうふといひ一人吹しやうは  
とも女あけあま里り小あんととて吹と又  
えの曲ハあんあえうといひをらとて梅らあ  
とあらしあてかろく流る樂く流風流るん  
とうといひろ中あえさといり流乃石川す  
り川ある川はあ山田中れ井戸力る流あも  
あさハあ流のあ也あ流り井ろ乃子あ  
とり唱れ難波乃流さるる川を流のあるり又  
風そく大あるんこたり流き事とてそ





うひげりとするん

弟ニ七夕乃因位ゆゑまささらけ志やう文ぶの  
所ところうひちあうちやくれ事こと

女むすめれよ縁ゆかりの結むすと弟あに一ひとりそあんならむを  
君きみなりされの世よよいかりうい初はつと終はつして  
り思おもめうさちの妙たねさうのまあう縁ゆかり智ちまて  
たらひさうあらんとして徳とく多たの子こともがめう  
らやまぬハさうわきり宿しゆく多たこそわてあんと  
のそびこいとをあうひとあんけんときらひ  
あうひと名な字あざ成なりえうひなれとつとつ  
まいちやう乃のうけよさうけいをとこのあう

さうりるわまのさらるゆえんすうわなこしき  
このかまはまやうを思おもぬひとふりておを  
ひら門かどをまはるまはる思おもぬ乃の鳥とりよこのまうと徳とく行ゆ  
あう一ひとあまハやまをさうりふひたうひふき  
らひきらそれさせぬふあうるあうはあゆ  
いあうあうは中なかなりとつんえかやと小黒こくろ  
白しろ多たことなる小由こゆ徳とくとハるふとさうとふ  
一ひと先ま祖そ乃のはるうと今いまもそ志し終はつしめされひと  
ねうとして史し記き此文このぶんを引ひてえけひ小末こまふあり  
まと遊あそ子ことりひふと御ご陽やうと云い階かゝ巻まとちきあ  
小子こご二ふたハの作しやく湯ゆ三さんの旬しゆん也なりとけ文ぶんのい遊あそ



お十六さへ仙陽十二よりまふと成てたりひ  
ふんさーせ川也とを小月をあひとる事か  
さうわさく夕あそ月のお子身成浦らてき雲  
さそひありつき八月乃入事を申一みて言  
峯よの初りもく原う九十九あて死せり極  
子ふりくまけきて月と飛見と忍ら程よあり  
ねもく原う移よあて空と飛初れとゆう志  
しとふるけきて百三ふしそ死せり天皇とか  
里て鳥小のりて天ととひ行てあ液の河を重  
て河と海とそくとわたりきされとをあひ志  
やく毎日び河あて水とあび行ふ故小水のけ  
り建てて見しありのとゆるは建てとくわこ  
しとを七月七日よハあひ志やく若法堂へ  
糸の目よそあそあひ結りしそと是と目こる  
事一とゆるはう年小一なあよとをりとも  
人きん乃うあよを一日一教りりび時鳥とさ  
ぎと羽とがう海て橋とさりてひこ星七夕と  
かより伝るわ是とかさき此橋とりも也漢  
王乃傳り一云鳥志やくもーの口よ紅の羽を  
志交二さいれ屋と乃あ小風まのくくわ  
こいつり是ハ紅葉よハあそ緑花紅の葉とい  
ひつけて羽乃字とゆうとまよむわ七夕れ





あうぬ別の瀧さ紀の羽よそみて細りする  
といへふとぞうさ里きりまさらるる此種と  
さくうりそくろひて厚くびこふるんと  
ゆふも度山城<sup>やましろ</sup>さるうく思ひよらけり  
あぞりひきりぬさらるさそい我とさりふこ  
さむるまを織るうそ糸よせてうらひとり  
て恥とあこふおりのうらうらうそふ志やう  
よなとあふ者しくりびうひてあんまよえ  
さくうらうきんをそとみちうらう弦とも山城  
あはさたのやうのやつとそそ<sup>せ</sup>魁をいそけり  
お<sup>とら</sup>りまさらるる此ひあ乃めけりいけり

下も子もとりよふくくらひとわきみのそて心  
のをくとほふさふかこわなれえきんいあ  
はん人よ似させたまえてそはるあそけんせ  
あまうりふうげけつへと一筆行てをよひ振よ  
はあ人れたらわをうらひあんとぶうきりさ  
とひあうらけりわそそ<sup>お</sup>顔乃視とさうし  
誰乃ふてとさうねらうらうらさう程よ  
書みうう千巻にとそせきりけ文とりりてう  
の娘のめのとよつれて川あそびおかけり  
とそとさう田とせてさうおすひめるふ文そ  
とそひうきておらに<sup>お</sup>我園林よりけきう人へ





まのうせらゑととりんもうほくるやとてり  
かうらありめてとてきりめのとねあけて見  
かにあふまなりりこの浦乃いのなまは見え  
かめもあるまよと思んともうひしき時をうだん  
う海のよは乃衣切んしほく煮ふあち八月の  
秋どがう着にたててくるりりさううみ  
りーあうり祢ね箱の開当に爰落う人るうそ  
つら中と成ふたりあふ漱えさみその川り  
うきち川まうらんのやまぬとわくしてうき  
あれがとありとふ志くまぬひ乃世どう  
らみあふまちとり誰ゆへどうと成つてまぬよ  
アさるくてありーくーのーわき乃  
清門のうに二品此まの流り馬ひみまきし  
比しくよゆくあまき空の標とるけまらんも  
こよひかゝる方りーあうまほくるんとさそ  
うさみうて

あまの思まく此白露の川のるり

淵とるわてまうきま川むらん

とありめのと浅まうるがうぬ袂せねハ七生  
何とやらんとあんまんの祝ふひうひて白摩  
の旗とて

あーやうあちとまつもれ海川



うきまのむじたあふせあゝあや

と書てふより一まけおすあまにとりてまうさ  
らろよ見えさまばひげとあちならぬるや也  
さりとておもひやむふふさるゝ縁をほえ  
玉さ門うひく也あつ時まさらる姫乃るや  
おまふまゝふそゝにるわ川原乃市へあこり  
まおけつふ子さふ初あふてまましやれ又ま  
いゝぜんとて初あふぬていめてまゝりける  
かちのおと一とうとむり一思まそらあてま  
そとまりてこのあまゝく  
うきまのむじたあふせあゝあや

我あなうつせ君ゝあゝあや

かお一乃とそとさわけりま一ハ昔まわひ  
るゝ乃教ま目の星ふ志はより一志て切りふね  
りりり時うすか燈とてりりせ一城女と  
くゝくひぬんそゝすましゝとまゝと里ける  
志のぶと里れまゝ一乃すそと切

表田野のりつむゝさ記れまゝりあろま

志のぶ乃見えれゝさり志ゝます

と書てとらりしとま縁ひ又あれあろハびま  
天さう乃内さかゝらんのひさうと鳥北野小  
書てとらりまゝは積人まゝ里しをあつまの



比羽とむして移りぬき小うけりて見ひらき  
くろんと後縁より何人志連ね思ひの多と  
あつり候と打がえしわあり時梅うえより  
くさだん志やくと傳けて心まきり  
表の風うごかしとこち候りあり  
ハ系花よ露の玉流さどむとひて思とけと秋  
乃多し物さぬとうみそくら書伝ふひく  
成しうともそぼいぬるりもるり里きり山城  
当まさらあり文のかよふとさしてこの  
程乃くらんあんとたあもな乃およおりに  
とて暇立して家中の者の志くぬるりあり

さうめいしてさきいり日せんというわ  
きりまさらあり又子多りうくとりし時その  
事ふは流文のかよひと殿のきり  
ゆいしてはうりの志乃志くね事ありたつ  
縁きもあていまめんと候とさあて身よ  
とまよとてうきめよあひひる何事も承作  
まよとてうらとありてゆわねまきさららむ  
こめえがわそん川千尋にハとあされつ  
しひとくちあさとあかく半り候  
みとけおせうらやうりきうくせんく  
とせゆりしとせもむもささるひあても



る山城一<sup>た</sup>とて服<sup>う</sup>せめと又文書て  
中ぎんのうすにまきまて山城ありてへ  
ゆきて子高と川<sup>川</sup>祿<sup>祿</sup>てひそく小見こきる  
とりひかくめてそけりけりけりひかり  
かも小<sup>小</sup>初<sup>初</sup>て子高とそくと<sup>と</sup>初<sup>初</sup>きりけり  
子高ハ川乃がとりあさりてなかりけ  
かよけりひきまて<sup>お</sup>右<sup>右</sup>実<sup>実</sup>なり<sup>初</sup>初<sup>初</sup>てうま  
たこるま<sup>ま</sup>立<sup>立</sup>め<sup>め</sup>らり<sup>ら</sup>けり<sup>け</sup>と山城<sup>山</sup>也<sup>也</sup>見<sup>見</sup>は<sup>は</sup>け<sup>け</sup>てさ  
まは<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>そ<sup>そ</sup>け<sup>け</sup>程<sup>程</sup>穿<sup>穿</sup>し<sup>し</sup>事<sup>事</sup>よと<sup>と</sup>思<sup>思</sup>ひ<sup>ひ</sup>て<sup>て</sup>な<sup>な</sup>の<sup>の</sup>ま  
えり<sup>え</sup>川<sup>川</sup>皇<sup>皇</sup>の<sup>の</sup>者<sup>者</sup>そ<sup>そ</sup>あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>又<sup>又</sup>う<sup>う</sup>そ<sup>そ</sup>へ<sup>へ</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>せ<sup>せ</sup>ま<sup>ま</sup>だ<sup>だ</sup>れ  
と<sup>と</sup>ひ<sup>ひ</sup>な<sup>な</sup>れ<sup>れ</sup>ん<sup>ん</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>警<sup>警</sup>た<sup>た</sup>と<sup>と</sup>ひ<sup>ひ</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>ま

ぬせてるが死よこまふとちあうちあま  
きり山城<sup>山</sup>也<sup>也</sup>使<sup>使</sup>小<sup>小</sup>び<sup>び</sup>ひ<sup>ひ</sup>て<sup>て</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>や<sup>や</sup>う<sup>う</sup>い<sup>い</sup>の<sup>の</sup>れ  
うま<sup>う</sup>り<sup>り</sup>う<sup>う</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>う<sup>う</sup>こ<sup>こ</sup>れ<sup>れ</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>し<sup>し</sup>こ<sup>こ</sup>ち  
いや<sup>い</sup>う<sup>う</sup>て<sup>て</sup>あり<sup>り</sup>事<sup>事</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>ふ<sup>ふ</sup>せ<sup>せ</sup>さ<sup>さ</sup>ま<sup>ま</sup>色<sup>色</sup>ひ<sup>ひ</sup>け  
ら<sup>ら</sup>連<sup>連</sup>す<sup>す</sup>よ<sup>よ</sup>そ<sup>そ</sup>同<sup>同</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>ち<sup>ち</sup>う<sup>う</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>に<sup>に</sup>一<sup>一</sup>  
人<sup>人</sup>は<sup>は</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>後<sup>後</sup>す<sup>す</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>ん<sup>ん</sup>を<sup>を</sup>  
少<sup>少</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>ひ<sup>ひ</sup>乃<sup>乃</sup>た<sup>た</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>食<sup>食</sup>ひ<sup>ひ</sup>ま<sup>ま</sup>さ<sup>さ</sup>の<sup>の</sup>川<sup>川</sup>皇<sup>皇</sup>  
と<sup>と</sup>忍<sup>忍</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>人<sup>人</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>う<sup>う</sup>寸<sup>寸</sup>権<sup>権</sup>乃<sup>乃</sup>こ<sup>こ</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>け  
と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>初<sup>初</sup>て<sup>て</sup>初<sup>初</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>ん<sup>ん</sup>う<sup>う</sup>の<sup>の</sup>川<sup>川</sup>ひ<sup>ひ</sup>さ<sup>さ</sup>ん<sup>ん</sup>乃  
志<sup>志</sup>く<sup>く</sup>何<sup>何</sup>る<sup>る</sup>う<sup>う</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>よ<sup>よ</sup>志<sup>志</sup>か<sup>か</sup>ん<sup>ん</sup>業<sup>業</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>  
め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>ハ<sup>ハ</sup>さん<sup>さん</sup>米<sup>米</sup>と<sup>と</sup>ひ<sup>ひ</sup>り<sup>り</sup>の<sup>の</sup>市<sup>市</sup>町<sup>町</sup>を<sup>を</sup>め<sup>め</sup>ら<sup>ら</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>ハ<sup>ハ</sup>く







しやてみふわ川よりてあつくせむうましく  
こりひあひきりふよ山くす太師らあかし  
のちうす記乃りうあもけきまこれあふ小三  
浦の志あろの甲れはく一めく浦のウハ乃大  
うつがふせていつくけくわさうり一矢一二  
百こく指て大弓柄せて志も色れ小きようそ  
めつうせてもやりをきくおひそせしそ  
某里はく米度よかどわたりうくあん然一小  
しそ所存ふあき志也う建ら父山鳥のるふう  
志として弓矢と死て宿翁のうこどがうありも  
のり一志うう者乃撥兵あり名字ゆえ似せ

ふだん在家也先年あう志ん魚野の合戦の時  
うま建ぬうの右師浦建ゆえ人よ浦りうす  
立ぬうこくかあてあや乃肘も重いむらふ  
以てれおかわ然とも武勇と自代とをうくよ  
口ふどの鳥れいつううの代々ん高きり  
しそあまいくらんあのを幸とせりるふうま  
思てわうりん事うまきしていそんと思め  
ううそふり山鳥の太師うけのうまひのそ  
うことみく庵うけ乃かわやかんひ乃う里や  
と同族ひさうまといそそりあめんくの所  
ちやうより山鳥殿の所いせんはゆりくは





なごともまわりけしひはやとと云山鳥の里小  
ぬくまはるハあつをほひれるひるまはとを是  
ははよるはるふせいのまご思るまはるまはる  
あまりのまはるこらんあつてらんは山うら乃  
あなまはるそいやらるまはるこくまはるまはる  
らんまはるまはるまはるまはるまはるまはる  
ひすの若乃戸ひくくまはるまはるまはるまはる  
あつてけあつては梅のふあひまはるまはる  
雲とのま余あまはるまはるまはるまはる  
まはるまはるまはるまはるまはるまはる  
まはるまはるまはるまはるまはるまはる  
まはるまはるまはるまはるまはるまはる

るけしるまはるまはるまはるまはるまはる  
まはるまはるまはるまはるまはるまはる  
まはるまはるまはるまはるまはるまはる  
まはるまはるまはるまはるまはるまはる  
まはるまはるまはるまはるまはるまはる  
まはるまはるまはるまはるまはるまはる  
まはるまはるまはるまはるまはるまはる  
まはるまはるまはるまはるまはるまはる  
まはるまはるまはるまはるまはるまはる  
まはるまはるまはるまはるまはるまはる  
まはるまはるまはるまはるまはるまはる  
まはるまはるまはるまはるまはるまはる





そ連うう呉刃るんぞうて流わしひ武勇  
乃乃ハよの事ハ小ハかまりてさうにふせう  
ゆえよらぬゆと取以たやあそひ一者仁  
にあつてもせんもふり志うともら矢のゆ  
小あひさうかひくくはけりうは乃か  
ぞゆえよひ連ひさ中たさうゆ母小とまり  
さういもひ流連て武勇乃中ハ振小中  
以り連う子小ハ来けいんえしく此おり  
ふそく小ハ人ハ孫ふ孫くし他ハ似けうと  
おや中事ハ以然て下もいたとへあも履び乃  
乃とけちりさくれともらりまらう志あそて

めんくハりハせん一う守と毛人けさ  
きまれく志承乃や以へきせんを乃より  
てか一うと中せく武勇れ中一まハ徳乃よ  
うりりて大者ふすくとけりうゆえ又我く  
か振乃無かけうならるわあもさうね事と  
うけ紗らやうれの中せえとてら矢ハ懐  
巨ハ罾以人び中ふまのささるるとそ孫にふせう  
述懐の所存うていと守せん中ハ孫をり  
まもるえれ所作のごうなまはた志ゆえ乃  
十二集と忍らゆえ辭せうハ礼祥くわきと中  
下らんをきう懐くわさうも中ハ霧ハけんご









やまゝの鳥も玉の救うちとせんとりひ  
けりきり雨りあゝ鳥のいもく救乃らるま  
らんむもいもく玉とつふるふ事なる  
又あり鳥乃いもくそまむと玉とつふる  
秦乃始室に三れたるあり海角玉と鳥羽  
玉也海角ハさいの所の也あまをちて川海  
とつふる水そう方へ三ちやうとつる乃く  
おがこと始室のかまやくせんそ勢まよりそ  
とつふるおがらのきとくハさ記とまよりむ  
けと又おがらの道るんとつるはけて

さぬくのともあわて中そお解鳥羽玉  
と異あよりみ及の鳥とひきつるよ二のつも  
これあひさ小黒玉も是より光るるを  
してせ習うくかわりきり始室乃志やう  
らんよおん忠とりよあわ大さる家とつ  
つりてうの中小つるこれ食物と還つて是  
とくりんとて家中より入時あくる張家の  
らり小より百のあひ松をりてうりよ鳥と  
をひおしあくろりこめはたま城うもひ  
記鳥とあおろりねこの玉おあつ時を世  
習あくく殺とおせだらうし始室秦乃武王と



いなきとたうし海きんとせし時比ふ海とか  
とにさらまらりしうきなりてふけのうは  
あまよる黒き事一ゆもねりし鳥羽玉と  
也とりんもめんくつときまきとえりて是  
程とりみうたか彦小にぬてさの三指志  
守せあわさるん詮な乃評定をけそく人りて  
さうだん者何事そいらさゆしとそりぬり  
あかふ若やとぞつひあひらり

中江心鳥見黒白駿徳林あき廻文乃事  
あしよ心うす右帝いんともはたふさふ  
てとよき門まりていとくこさうしき事

る事ともぬ言とのことも事によまりふぬよ  
はとてとも一りんひはしちりんおり一六  
事一とむがせらまんもろふしれり見と  
中いぬるを園い日もうろかをしま門園と  
りよがせと毛むくぬい乃せいさうをいお中  
乃大おゆをゆく園北森の鳥渡乃射殿り  
際もろろらん成を一他門よとりてをき志山  
高こび庭をゆく海う見こはくねあうひさ  
きんとけよとうさけろしわきそのお同心の  
うさくをいらくもいぬかかくとあまら  
いやとさうそあ三日とめらうさすえせあ



海ら海へいせいのあてはわかれ申かえ乃藤と  
し二系三系あを死返りて鷺の<sup>サキ</sup>一門勢<sup>セ</sup>れ  
ちの者乃しくくにしくみふらうとらる  
——次救うちるんどののうい志すまは  
ハ——うりあき世わたとひ志がせはとも  
よくあひたをささめてうけ引をん返てう  
らもハみうさそん——い海——ま月あつけと  
いて見ら連は人——とりふまかこの異けん  
——同志けりやうくられ志うハあら鳥<sup>ト</sup>片  
志とひ<sup>ヒ</sup>ひやとありて海わきう重ていまく中  
かえとも森の本とをとあきあふらわ麻<sup>マ</sup>の

きゆいやくらあけてかふるまどたつせて用<sup>ヨウ</sup>心  
を<sup>ウ</sup>てのあ<sup>ア</sup>りさひしくらうまてひやと  
りきめれかやうまはり<sup>リ</sup>建もささうふハ  
見わけむい人も救うら乃う思ようすと  
りふさ獲あつらんまてう海わきわらうま  
まさくらうりあよるんるりける<sup>サキ</sup>鷺ありこと  
にあきておんむんるわくれといふふをびぬ  
なるやうにとおもふ山<sup>ヤマ</sup>城<sup>シロ</sup>守<sup>ウ</sup>りやうハ南  
世と忍らふひやうく久くたきてかんく  
且うこう守りてさ<sup>サ</sup>を<sup>ウ</sup>り引<sup>ヒ</sup>引<sup>キ</sup>あ<sup>ア</sup>く海小  
る海かとはましくうのゆえやとまわりこ



せんとうせんともふそのさう乃り建う  
何れ下もどまがーせり里はきれ梅らす  
の一留めえくふ里とそそく自他あんあんか  
か厚うりーはくうひくーとりひえれ  
え山城さきぎんぢがきよせんしせりふそ  
しつて鳥めうむわうじ福ん志く小存留け  
方よりふくことこのえたりけりありふ  
ー小びり突と祿うふあふいとひなわ何し  
小いさううもよハけと見ゆ人さふと服立し  
久れとけおの事とあもくくぬきやとー  
うたうとよせうせてハはくる葉もあーし

中さくらあるとめんと肉書とそはくりけり  
流殿北織を存い中うにそ逢るうんをと祿  
さる中せーめいこのうとくあう一かうはふ  
かまひ乃く目んだいよりあそあ志かりとい  
へとも姓をうそありはありちやうちや乃  
とうりううらたけー黒白を色うとひと  
とまま建けりるるりーよ門てるふー見は  
らり子細あわおあひひてそつにならかう  
まへうう寸と書てそ送りける我園林あは中  
うもよりあどとらうへきなが云難祝の折しを  
け文と忍てさてハ事こさうハううさんと













のまはとくふしとあはれおしとあつち  
つなむふぞくとさうりれおにうけういどと  
あむの月のがふつとむ宿生家ちんなまは  
成佛のあとをちんげんせいきままりあ  
ちやうふしとあわぐまん大ぐまん乃あ  
ためえこかりよ重こかりとらしせう孫  
大せう孫のゆうべあはあのかくわ月のが  
とあますあやあしくふりてハ孫まかん節の  
うきとあまあふざとろかち連はくあ  
りやくのほくしとつけちうとうあくあう  
とえくぞくいやしととをえうのあ

うらうらあはあすはまの子れあうま  
りりあうらうとせとーたとひとす  
ざうらんつらうとせすあよせんたうけて  
きたいのあひとひらうーせんひあう  
ういしまこととあふしてつらとらし  
甲とあきすまやうふらんとうをんりそ  
せうあやうまうとんハふちのふとらう  
ーせんがいとあさん恐く豫言  
八月廿六日  
はまらう  
山城守殿  
とさすうこいかりらあはあ人れあふかく







のちあふくど城まゝ日んがうめふらうおん  
とうまう人言とーしてらうむい乃あさきりを  
のりきんしとをなさあむつらむりさう人  
のぎよよせなりわ我木ハ志ん小あうそ名よ  
あらすんと但合戦とらりるんのとうめか  
あらんめひて又津けうとと後りの種く乃志  
うんととくひと人りりきさき嶋のかりあり  
小船くあよくとかりやうー振くの難言と  
とま川るんぞとらりこぎ乃風小をあぐふしと  
まらん鳥名高よーしてさく志や是とやめ鷺と  
志やうららんらうしとと来きうすとり小自

志やうらんの第一也風まやう乃やまくとりて  
ととり小月乃志り志之の多他さ多よあうす  
や万葉十六げうとんれけくまうをう張まむ  
鳥まのみあこももそととあこよ一門  
た今六

うすてふ大とそ高れ返さてあえ  
き海さね志城あろくとそそさく

鳥と大おそとりとり小東河也日返さうり城  
とそとり小物くひまこさうとりありあらくと  
とこりーとるわやゆりあハさうて鳥とがめ  
うわこハばがえす我々詩歌りーと



茶屋の裏面晴初雲江鷺立るんと云六姑小ハ

中のさるあよとのうは激り立鷺

立てもねてとまわぬ目そあき

高砂やゆりまのりわのさきせと

ひよりを祿しとあそふ物と

この詩方り又治れうきみ

やまれうこハ霧色うそくさびきせさ記り

うそあさき乃さくともふううとたう

見ゆりま治橋のるうくとみえ目と子に

小架洗ひ舟乃所く初ちうひあらん

是ハ句無詠三悉よあ人か所乃初也私語の

あんハ激氏と以てもくとすうとあは白樂

天詠人ハ江口のまくりあうふ乃と風ハ

白川れうりかわまハ是詠とりよ書とりよ

た也人ハせんたいもあろまりるる島せん

さうありまよとたくとうとりよはせん

せんとうしもんげとまくとりよ小きさんて

あうくつとうとりよあ書この一まんかわ

又うらまのふさげもんやの使と急かこ

い志あき苑のあろまうとせんとりよくす

と云句是この一まんかわるんぞうこれ一句

とくともわかうとう歌一のしと父母のま







りてこわいよりもあはれしーあんならあんなあう  
あよまほくあんであゆまうのうんりちろん  
とひとをる月しそ一あやのいけういさわ玄  
るうときう守あよあんそくそくのやーろふ  
けんめつぎうてにりふひうー目まらげ一あ  
いとかんすうよ水口乃るふーあんなせい  
あいのちうくちやうあんふあこあうりやし  
くそあ位の射ーあゆまよもほそそのかく  
まうーあをほきあまのくうそすまをほうい  
せーめくわあまのめくすまうーあ字とら  
けうそあるまのかわいてまきちちうのと紀

二神乃あうそま記といふれあともあちやこ  
ととすれ神也あは乃あういつあさよあ  
りはあつういけんらんふあううハあん  
せきのしーあよせんぶちうよありあひ自  
代まなまとあうりーあよほそまやくなの目  
あさまーせいとあうんさうりのまのあに  
つううらあはあゆりーあまらうらうとあめ也  
あんとらああひあよよりーあまらあひ  
さんとらああんとあまらあまらんかあわあ  
あーあとほくまあまらああああああああ  
ああああああああああああああああああ

八月廿六日

あまらあ



九也緒

と書て大くと巻くはと我周縁よりぞはる  
りーらる結結ひき忍るにあん小お毒き  
み返りかわらぬ度めんくま月うう思ひつ  
みりう中ひひあひらるはるやと小中勝あ  
つそまそ方くふらまひあん守を快し曰  
東山ぎ巻林小東市作と志ありあんういと  
うりりま守くまあんと事と志んきとま  
しとらうらんとまきとたと目しひ我とら  
こみゆひひまきと一然む先日乃むらう  
志さひあち志くとのあうはの所そのいさ

と現りよさんせ守一家他門るへくと  
らひとうぜんふまのうす巻とまきとれ  
まさらあどりふまの二門ひらうとまきと  
あ勝がわめんくはあらよあすんむま  
た今後乃世のかくを相さあいさ一水  
音のおくま来乃らう定て巻とまきとあ  
いとまき小まきとらうあし事とごせはま  
といえま来ら三日いせん小麻着はやう小  
まきとらうあつきののあまとなどあま  
まららまきとまきとあつきののあまとなどあま  
あんまうらんぐんのとまきとらうあまきとらう風



きつものまらむりと志しらくもくぢんとか  
くめこうぶ一味のかりまよくり強る層ぶ  
まのさりそうげきとんこうふしと東海乃  
志せつとあらさす不具豫言

八月廿六日

つむりまのさあら

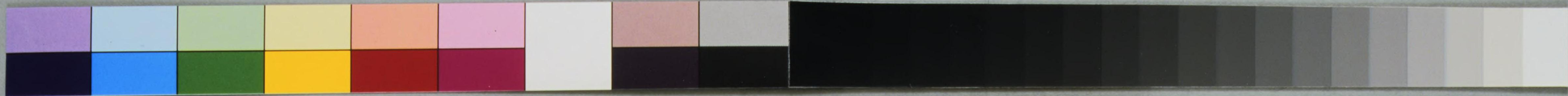
志せんとやーく文その村よいましく

まのさくろぬいととえあまやましものうこ  
はまあらがとん志やうとかりあるとあら也  
まのさあらぶとやくたいたうりーとゆう  
トのがまれひとことかわよ陸まそらちと  
まのさめんとかりとらとらまも陸まわら

とうりしるんしとひとおくちらうひり  
さうんせまのりかゝまてぢやうふのかり  
はまらろまきはまのまよとらうしとるんぞ  
えぢろまくれむ志ゆちやう乃あひまんがひ  
はまらろてうしととりち志のまんにまら  
すつこと細りなちうまう乃うぢりちうま  
不備豫言

八月廿六日





鴉鷺合戦物語 WA8-5 01-039

国立国会図書館

